（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：医学部（医学科）・6年

氏 名：館坂　侑市

授業科目名	選択実習（麻酔科）
研修先 （大学・国・都市名）	マインツ大学（ドイツ・マインツ）
研修期間	令和5年2月13日　～　令和5年3月15日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

マインツ大学医療センターでの実習内容は、麻酔科の一員として実際に導入から術後ケアまでを見学または実践した。また、ドイツでの麻酔科の働きやその他スタッフの役割の理解、また英語によるコミュニケーションを通した、医学的説明の理解や現地でのスタッフとの交流を図った。具体的にはマインツ大学医療センターでは、診療科ごとに手術室があり、それに対応して各科ごとに麻酔科医が従事している。そのため、実習期間では脳神経外科、外傷・整形外科、泌尿器科、一般腹部外科を1週間ごとにローテーションし、毎週新たな環境に身を置く流れとなった。実習全てが同じ環境ではないために、多少の精神的負荷がかかるが、おかげで技術面以外でも大きく成長できる実習となった。具体的に経験したこととしては、マスク換気、静脈路確保、胃管留置、気管挿管・抜管、動脈血ガス測定、薬品希釈、麻酔維持記録、その他麻酔準備、手術見学を行った。日本とドイツでの医療現場での違いを知ることができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

ドイツでの生活を経験し、毎日が新鮮で、非常に有意義な時間を過ごすことができた。ドイツの国民性の中で最も魅力的だと感じた点は、日本と違い、プライベートの時間が仕事よりも重要とされていることである。例を挙げると、ドイツの手術室では最低限の安全性を確保した上で、手術患者をできるだけ早く回せるよう工夫されている。具体的には、手術室の手前に麻酔準備室があり、次の患者がスムーズに手術開始できるよう、先に麻酔をかけられる小部屋が設置されている。無駄な時間を省くことで、業務の終了を早め、個人の仕事後の時間を確保することができるようになっている。日本では実現困難な点も多くあるが、家族や人間関係を大切にするドイツの文化は大変魅力的であると感じた。また、実習前に心配していたこととして、言語の壁が問題になり得ると私自身考えていた。しかしながら、英語が母国語ではないドイツでは、日本人にとって比較的聞き取りやすく、先生方も皆親切であったので、ほとんど問題なく終了することができた。相手の目を見て、伝えたいことを堂々と話すことが大切だと、日本にいる時以上に実感した。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

ドイツでの実習を経験して、1ヶ月ではあったが、数えきれないほどの新たな発見があった。ドイツで過ごす間は日々の実習や生活に一生懸命であり、自分自身を振り返るタイミングはあまりなかったが、改めて日本での実習を再開し、視野の変化を実感することができた。手技や麻酔管理について、道具や装置を実際に使用し、理解を深められたことはもちろんであるが、なにより全体を通して、格段に度胸がついたように感じた。英語が苦手な私にとってはそもそも海外へ行くことさえも不安に感じていた。しかしながら、実際に手術室でスタッフの1人として扱われた時に、ここで英語で会話をしなければ、自分は何も前には進めないんだと感じた。初めは英語を聞き取ることだけで精一杯で、考えを思うように伝えられない場面も多くあった。しかしながら現場にも徐々に慣れ、間違いを恐れず言葉にしようと意識を変えることで、最終的には自分のやりたいことや考えを先生に伝え、手技や知識を非常に深いレベルで実践することができた。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

1ヶ月のドイツの麻酔科での実習を通じて地域医療の重要性を改めて再認識することができた。日本と同様にドイツでも、地域医療は医師やスタッフの人手不足が深刻であり、一人一人にかかる負担が大きくなる傾向にあるので、物的資源や人員資源をなるべく増やし、深刻化に歯止めをかけるような取り組みがされているようであった。日本は島国であり、陸続きではない地域が多く存在する特性上、ドイツと同じように語ることはできないが、前例としては、ドイツをはじめ欧州諸国ではかかりつけ医の制度化が先駆けて行われており、日本は後追いの形で検討されている。かかりつけ医の制度化は、医療資源の節約や患者の満足度向上の目的があり、実際にドイツでは医療の効率化が結果として出ている。そのような理由で、時間をかけて留学し、海外で医療技術の他に制度や仕組みをも理解するということは、自国と比較する上で非常に有意義であったと感じた。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：　医学部医学科5年

氏 名：　秋元あこ

授業科目名	選択実習（麻酔科）
研修先 （大学・国・都市名）	マインツ大学（ドイツ・マインツ）
研修期間	令和5年2月13日　～　令和5年3月15日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

脳神経外科麻酔/泌尿器科麻酔/一般腹部外科麻酔/外傷・整形外科麻酔を約1週間ずつ学びました。1週目は脳神経外科麻酔を専門としている福井公子先生のもとでドイツと日本の麻酔の違いを教わりながら、麻酔の流れを覚えたり様々な手技を練習したりしました。2週目以降は1人ずつに分かれて各診療科で実習を行いました。学生ができる手技としては、術中モニターの装着/静脈ラインの確保/マスク換気/気管挿管/胃管挿入/血液検査(血液ガス、ABO血液型)/薬剤投与/麻酔チャート記入などがありました。静脈ラインの確保や気管挿管など、日本の実習ではあまり実施する機会のない手技も積極的にやらせていただけて非常に有意義な実習となりました。また、モニターの見方やベンチレーターの使い方についてもかなり詳しい内容まで教えていただくことができました。麻酔チャートを自分で書く機会もあり、やはり先生の麻酔を見ているだけでなく自分でモニターの値を見て考察することで理解が深まるということを実感しました。また、今回は麻酔科の実習ということでしたが、ドイツでは各診療科ごとに麻酔も専門があり、さまざまな診療科を回ることができたので麻酔以外の分野についても教わることができて勉強になりました。先生方同士の会話はドイツ語ですが、日本の学生に指導する際は英語で教えていただけました。医学英語はやはり難しかったですが、後から自分で調べたり、日本での実習で教わった内容と照らし合わせて考えたりして先生方の話を理解できるように努めました。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

現地に到着して1番初めに感じたことは、やはり言語に関することでした。実習の際は英語で指導していただけると事前に伺っていたので、ドイツ語は挨拶程度しか勉強せずに渡航してしまいました。実習では英語でコミュニケーションを取ることができましたが、交通機関のアナウンスはドイツ語しか流れないことも多く、困ることもありました。しかし、ドイツの人々は全体的に英語を話すことができる割合が高いと感じました。普段使う言語はドイツ語であるにも関わらずほとんどの人が英語を流暢に話していました。特に若い人は話せる割合が多いそうです。日本にいると英語を話せる人の方が少ないので英語を話せるように勉強しようと思う機会はあまりありませんでしたが、今回ドイツに行って、母国語ではない言語である英語を話せるドイツ人をみて、自分ももっと話せるように勉強しようと感じました。そう感じると同時に、勉強するよりも、実際に英語で積極的にコミュニケーションをとったり、相手が使う表現を真似してみたりすることで話せるようになるのではないかと感じました。
また、リサイクルに関してドイツはかなり進んでいるように感じました。ペットボトル飲料は飲み終わった後のボトルを店にある機械にいれると客にはボトル代が返金され、ペットボトルはリサイクルされるようになっていました。他にもいらなくなった洋服を街にあるボックスに入れると、リサイクルされたり途上国へ送られたりするシステムもありました。ペットボトルの返金システムに関しては、ほとんどのスーパーに機械が置いてあり、住民がリサイクルに協力しやすいようになっていると感じました。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

この1ヶ月の実習を通して、自分の意思をきちんと伝えられるようになったと思います。ドイツの人々は自分自身のことをとても大切にしていて、だからこそ自分が思っていることは何でも相手に伝えているように見えました。そして意思を伝えられた側は大体のことは受け入れており、意見が食い違うときはより良い方向に向かえるように互いにディスカッションしていました。その様子を見ていて、自分の意思を伝えることができたらもっと過ごしやすくなるだろうと感じ、以前より自分の意思を伝えるようになったと思います。
また、最も成長した経験について、挿管などの手技にチャレンジさせていただけたことはとても自信につながりました。しかし1番は周りの様子を見ながら自分にできることを探して実行できるようになったことだと思います。日本の実習では先生方に教えていただくという受け身のスタンスでいましたが、ドイツでは学生もスタッフの一員として出来ることはやっていいということで(先生の指導下でしかできないこともあります)、3.4週目になると麻酔の流れもわかってきて、次は何をしたらいいか自分で考えて行動できるようになりました。受け身の姿勢でいるよりも積極的に動くことでとても楽しく実りのある実習にできました。
また、静脈ライン確保に関して1回目は先生に見てもらいながら行いましたが、2回目には、「先生は見ていないけど自分で思うようにやってみて。」というふうに言ってくださる先生もいて、とても緊張しましたが任せてもらえたような気がして嬉しかったです。実習全体を通して、自分で思っている以上に自分にできることが多くあることに気付きました。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

今回、世界の中でも医療水準が高いとされているドイツで実習をすることができ、非常に勉強になりました。日本との麻酔の違いを学ぶことができたのはもちろんですが、da Vinciを用いた手術や覚醒下での脳外科手術も見学することができました。ドイツでは腹臥位で手術をする際には、目や挿管チューブなどを鏡に反射して見ることができる台を頭のところに置いて患者さんの安全を確保していました。アメリカでも広く普及しているようで、日本でももっと普及させることができたら良いと思いました。また実習全体を通して特に印象的だったのは患者さん1人あたりの手術のスピードです。日本では外来日と手術日が分かれていますが、ドイツでは手術担当の先生は毎日何件もの手術をしているそうで、手術慣れしていることもあってか、da vinciなども含めて全ての手術が短時間で終わっていて驚きました。医師不足が問題となっている鹿児島で、外来担当医と手術担当医を完全にわけることは現実的ではないかもしれません。しかし、麻酔に関しては日本でも取り入れたらより良い医療に繋がるのではないかと思うことがありました。それは麻酔導入室の設置です。ドイツでは麻酔導入室で麻酔を行い、手術室に移動し手術、その後は回復室に移動してバイタルが落ち着いてることを確認して病棟へ帰ってもらうという流れでした。そのため前の手術が終わったら片付けている間に次の患者の麻酔導入を行うということが可能でした。日本でもこのシステムを取り入れることができたら、1日あたりにこなせる手術の件数が増え、患者さんの手術までの待機期間を減らせるのではないかと思います。費用や場所などの問題もありなかなか実現させるのは難しいことではあると思いますが、今回の実習で得た気付きを周りの人に話して、このようなシステムがあることを知ってもらえたらと思います。
また1ヶ月という短い期間でしたが、英語を話すことへの抵抗はかなり減りました。しかし、医学英語に関してはかなり勉強しないといけないと痛感したのでこれからも日々努力していきたいと思います。コロナによる渡航制限も緩和されてきて、今後は鹿児島でも外国人の患者さんが増えてくると思うので、海外からの患者さんが来たときには、英語でコミュニケーションをとり、少しでも患者さんを安心させられるような医師になりたいです。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：　医学部　医学科5年

氏 名：　大瀧郁香

授業科目名	選択実習（麻酔科）
研修先 （大学・国・都市名）	マインツ大学（ドイツ・マインツ）
研修期間	令和 5年 2月 13日　～　令和 5年 3月 15日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

麻酔担当医の指導のもと、医療チームの一員として麻酔業務の見学、気道確保、静脈路確保、血液ガス検査、薬剤調製などの簡単な臨床業務の補佐を行い、2週目からは各自違う部署で麻酔科実習を行った。麻酔担当医や麻酔看護師などから指導を受け、ディスカッションにより理解を深めた。
日本とドイツの医学部教育システムの違いにより、ドイツでの臨床実習は日本でいう初期研修に近いものだった。日本ではなかなかないほど一日に何件も手術麻酔に入らせてもらい、患者さんの入室から、麻酔導入、手術中の麻酔管理、手術後の抜管、麻酔回復室への引き継ぎまで患者さんに付きっきりで実習でき、一部分のみの見学ではわからないような一連の流れを系統的に学ぶことができた。気管挿管や静脈路確保などの手技についても、初めから実際の患者さんに実施する機会を与えてくださり、指導医の先生方には手技のコツや麻酔の奥深い内容まで熱心に教えていただき、実践的で非常に有意義な実習となった。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

現地の医師や医療従事者は、日本に比べて時間に追われていないと強く感じた。仕事の時間内は決められた仕事をテキパキとこなし、終業時間がくると即帰宅するというメリハリがとてもあり、家族との時間やプライベートを大事にしていて仕事のためにそれらを犠牲にするという価値観ではないのが伝わってきた。外に飲みに行く代わりに、友達を自宅に招待して家族ぐるみで食事をしながら時間を過ごすことが多いというのも、素敵だと思った。日曜日はほぼ全てがお休み。日本は24時間営業のコンビニが至るところにあり、サービスをうける立場からすると非常に便利なかわりに、働く立場からすると疲弊しやすく、決して望ましい就労環境とはいえない。考え方や価値観の違いなのでどちらが優れているというわけではないが、日本と違う価値観や文化に触れることができ、自分のコミュニティの中での価値観が全てではないと知ったことは、いい学びになったと思う。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

研修前の日本での私は、人目を気にしたり、失敗するのを恥ずかしいと思ったり、挑戦するのを怖れたりすることが多かったように思う。ところが、この研修を通していい意味でたくましくなったと感じる。そもそも英語でも大変なのに、ドイツ語での先生や医療スタッフ同士の会話はちんぷんかんぷんで、ドイツ語で指示されてもまるでわからないような、慣れない環境の中では苦労も多く、それに比べれば今まで気にしていたことがとても小さなものに感じられるようになった。年功序列もなくみんながお互い対等にフランクに接している雰囲気のおかげで、1人で萎縮しているのが勿体無いように感じ、自分を出して積極的に関わろうとすることができた。また、今まで親や周囲の人に守られて生きていたが、初めて自分だけで海外で生活することになり、問題が起こってもなんとかして解決しようと奮闘したり、拒否されるのを恐れずに交渉したり、弱音を吐くよりも笑い飛ばせたりと、精神的に強くなったと思う。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

マインツ大学で麻酔科医として働く日本人女性医師の先生には、病院での実習中だけでなく、ご自宅に招待していただいたり、食事に連れて行っていただいたりと、大変お世話になった。私は、元々この研修の目的の一つとして、日本人医師がドイツで働く様子を見てその姿勢を学びたいと考えていた。先生が病院で働く様子やご家族と過ごす様子を拝見する中で、先生の人柄や先生が周囲から得ている信頼に感銘を受けた。目標とする人がまた一人増えたと思う。多様化する現代において医師として地域社会に貢献するためには、最新の医療情報をフォローアップするためだけでなく、一人一人の様々な立場や考え方、感じ方や感情に十分に配慮するためにも、世界的な広い視野を持つことが大切になってくると思う。今後の少子高齢化が避けられない日本において、地域社会の発展に寄与するためには、地域住民一人一人の人生の価値を高めることができる柔軟で包摂的な医療活動が必要ではないだろうか。そして、今回の研修で人生の選択肢が広がったことは、私にとってもとても貴重な経験だった。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：医学部医学科6年

氏 名：斎藤浩太郎

授業科目名	選択実習
研修先 （大学・国・都市名）	ウェイン州立大学（アメリカ合衆国・デトロイト）
研修期間	令和5年3月1日　～　令和5年5月18日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

ウェイン州立大学、ミシガン小児病院で、てんかん患者の脳波データの解析を行う研究に従事し、脳の新たな電気生理学的ネットワークの可能性について見出すことができた。研究を遂行する過程において、脳波判読の手法およびBESAを用いた脳波の解析手法や、MATLABを用いてテキストやスプレッドシートなど外部データを取り込み分析する一連の研究手法を学ぶことができた。また、てんかんの臨床における薬物療法および外科治療の実践について理解を深めることができた。特にてんかんの緩和治療手術においては、日本では未認可であるがアメリカでは2013年から認可されているresponsive neurostimulation：RNSについて治療法の具体的なイメージをつかむことができた。さらに、研究室に留学されている日本人医師の先生のお話を伺い、医師のキャリアにおける留学の意義について見識を深めることができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

アメリカで2か月半の間暮らす中で、スーパーマーケットで食材を買い、借りているアパートメントで自炊をするという生活を送っていたが、こちらでは物価が非常に高くインフレが進行していることに驚いた。現地で偶然知り合った地元住民の方たちによると、コロナ禍が明けたものの労働者が仕事に復帰しないことで人件費が高騰しており、また人々の需要の意識がサービスからモノへ転換したことから需要過多による供給不足に陥ったことでインフレが進行しているのではないかと考えているようだった。このようなことは日本で商品の値上げが進んでいることとつながると感じたとともに、デトロイトでは経済や政治に関心を持っている人が多いのだという気づきを得ることができた。帰国後は私も日本の経済など社会情勢にも目を向けて生活していきたいというモチベーションを得ることができた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

私は基礎医学研究に非常に興味を持っており、将来的に基礎医学研究者としての道を模索したいと考えていたが、医師免許を有する者が基礎医学研究を行うことの意義について明確なビジョンを描くことが出来ないでいた。今回の留学を通して、医師の先生が研究を行うことで患者さんを救えるのだと誇りを持っておられる姿を拝見し、基礎医学も臨床医学も医学であるからには、その成果は主に治療という形で社会に還元されるべきであり、将来の臨床を見据えた形で自らの研究を捉えることが必要であると改めて実感した。また、医学は今後ますます社会との関わりが強くなっていくことが予想され、研究者は社会に対する説明能力、情報発信力、高い倫理観が求められるということを学び、将来、研究に従事する上で重要なメンタリティについて理解を深めることができた。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

卒業後は、医師として、研究・教育・臨床に従事することで地域社会に貢献したい。研究者としては、基礎医学研究に従事し、様々な疾患の病態解明や新規治療法開発に向けた研究を行いたいと考えている。研究の視点が多角化している現在、特定の一専門分野のみではなく、国内外の複数の研究室のコラボレーションを通じて新たなブレイクスルーが生まれることが多くなっている。こうした状況において必要なことは、周辺の専門分野や全く異なる専門分野を含めた多様な分野に関心を有し、既存の専門の枠にとらわれない視点を持って研究を行っていくことだと考える。今回の留学で得た臨床研究におけるスキルや経験を活かし、幅広い知識を基盤として高い専門性を持った研究者を目指していきたい。また、教育を通じて、研究や臨床、留学で得た私の経験やスキルを次世代に伝え、医学がより発展していけるように未来への礎を築いていきたいと考えている。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：医学部医学科6年

氏 名：土元香菜子

授業科目名	選択実習
研修先 （大学・国・都市名）	ウェイン州立大学（アメリカ合衆国・デトロイト）
研修期間	令和5年3月1日　～　令和5年5月18日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

ミシガン小児病院では、難治性てんかんの臨床研究、臨床実習を行いました。臨床研究では、てんかんの最先端の研究に触れ、脳機能ネットワーク解析による新たな電気生理学的知見を得ることができました。この研究は難治性部分てんかんの術前評価を改善し、病変摘出率及び機能温存率の向上に貢献することが期待されています。本研究で収集した膨大なデータを解析するために、数値解析ソフトウェアおよびプログラミング言語であるMATLABを活用しました。この経験により、研究において膨大なデータセットを扱うスキルを身につけることができました。臨床実習では、脳波判読のレクチャーやてんかんカンファレンスへの参加を通して、脳波検査、神経生理学的検査、脳磁図、神経放射線診断等、てんかん診療の基礎と応用を学びました。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

小児病院で実習して驚いたのはアメリカの小児科レジデントの70%以上が女性であり、多くの女性が仕事と家庭を両立させ、医師としてリーダーシップを発揮していることでした。性別によらず、育児や介護など家族のために休みをとることが尊重され、さらに趣味のために休みを取ることも権利として同様に尊重されていました。家族の時間を大切にする価値観や個人が大切にしていることを優先する権利が当たり前に認められているからこそ、性別に関係なく働きやすい環境があるように感じました。また、アメリカではホームパーティやスポーツ観戦など、研究室の皆を誘って楽しむ機会も充実していましたが、そこで印象的だったのは、本人だけでなく家族まで誘うことと、個人の趣味嗜好を尊重し、参加するか否かの自由が与えられていたことです。個人の選択が尊重されるため、言葉の壁や人種、宗教、文化の違いがあるにも関わらず、私は日本にいるときよりも自分らしく過ごすことができました。アメリカで生活した経験から、多様な背景を持つ個人が輝くためには多様性を尊重し、皆が自分らしくいられる環境を作ることが重要だと学びました。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

日本は同調圧力が強く、声の大きい人に意見を合わせがちです。私は留学前、自分の意見を持つことは、それが受け入れられるか否定されるかのどちらかであると考えていました。しかし、アメリカでは異なる意見を持っていても、否定されることなく共存できることを知りました。私はそれをてんかんカンファレンスで実感しました。てんかんの治療には、小児科医、精神科医、脳神経外科医、神経内科医、心理士など様々な専門家が関わります。カンファレンスでは、専門家ごとに治療方針に異なる意見を持っていることもありました。しかし意見の相違があっても、他の人の意見を頭ごなしに否定することはありませんでした。このカンファレンスの目的は、治療方針を練り直し、医療者の独断による誤りを防ぎ、患者さんが最善の治療を受けられるようにすることでした。チーム医療するうえで不利益な仲間同士の衝突を、互いを尊重することで避けていることがわかりました。自分の意見を述べると同時に、互いの意見を尊重することで、異なる視点を持つことができ、多様性を生かすことができると理解しました。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

私の目標は、神経難病を治療可能な病気にすることです。そのために医師として臨床経験を積み、病気による問題や苦労をより深く理解すること、また北米で築いた貴重なネットワークを生かし、神経難病の研究を継続していきたいと考えています。鹿児島では、フィラリア症やHTLV-1関連疾患といった地域の課題に熱心に取り組んだことが、世界的に注目される成果を生み、同様の課題を抱える地域の医療に貢献した歴史があります。このように地域での研究も、世界に発信することで大きな利益をもたらすことができると思います。私は今後も研究を継続したいと思っていますが、その際、地域で取り組んだ研究の成果を世界中の人がアクセスできる情報にすることが重要だと考えています。クローズドな場での発表で終わらせず、英語での発表機会を作ることや、英語論文にして研究を広く伝えることで、自分の専門分野のさらなる発展を促したいと思っています。グローカルな視点を大切に世界に発信することで地域の発展に貢献していきたいです。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 医学部医学科6年

氏 名: 松見信之介

授業科目名	選択実習
研修先 （大学・国・都市名）	トロント大学（カナダ・トロント）
研修期間	令和 5年 3月 8日　～　令和 5年 5月 17日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

私はカナダのトロントにあるトロント小児病院(通称SickKids)にて約2か月間実習させていただきました。
SickKidsは病院一つが小児科の病院で、ほとんどすべての診療科が入っているトロント大学と連携している病院です。臨床だけではなく、研究も盛んにおこなわれており、カナダで最先端の医療を展開する病院の一つです。
そんなSickKIdsにはさまざまな診療科がありますが、その中で私は小児神経部門の臨床神経生理ラボの大坪宏先生のもとでてんかんに関する実習をさせていただきました。
日々の実習では毎朝夕に行われるhand over, 週に一回のpre seizure conference, seizure conference, NICU conference, EEG routineといったカンファレンスを主に見学させていただきました。私にとってててんかんはあまり馴染みがなく、脳波もどのように読んでいけばいいのか分からない状態で、日々のカンファレンスを理解するのは大変でした。しかし、大坪先生をはじめ、ラボの先生方に疾患や検査システムについて教えてくださり、また、私個人としてはカンファレンスで出てきた疾患を勉強したり、脳波所見の勉強、てんかんに関する考え方の勉強をさせていただくことで、てんかんの奥深さ、面白さを体感しました。
特に興味深かったのがseizure conferenceで、そこでは、脳神経外科、脳神経内科、てんかん専門医、看護師など様々な職種の先生方がオンラインで集まって、患者の治療方針について議論を交わされていました。薬剤抵抗性てんかんに対する治療で、日本では承認されていないDBS(脳深部刺激療法)やカナダでも承認されていないRNS(発作反応性電気刺激療法)をそれぞれの専門的な視点で考察する様子はチーム医療の重要性を改めて感じ、お互いをとても尊重して感謝し合い、考えていることを率直に発言し合える雰囲気は感銘を受けました。
他にも VNS clinical teamの診療, 和田テスト, SEEGの手術、大脳半球摘出術、MEG検査などてんかんに関わる様々な臨床的な処置を見学させていただきました。手術の適応や検査システム、検査結果の解釈を先生方に教えて頂きながら学ぶことが出来ました。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

トロントはカナダの経済中心都市であり、ダウンタウンエリアには超高層ビルが数多く立ち並ぶ都市です。大都市であるにも関わらず治安が良い都市として世界的に知られていますが、日本と比べると治安は良いとは言い切れない点がいくつかあったように感じます。
カナダでは大麻の合法化されているため、道路のあちこちで大麻を吸っている人を目にすることがありました。自分にとってはこれは驚きましたし、たばこを吸う感覚で大麻を使用する風景は異様に感じました。
また、近年のトロントでの物価や土地代の上昇の影響により、ホームレスの数が増えているそうです。現地で生活する人もこの浮上してきた課題を不安視しており、ホームレスが地下鉄で襲ったり、逆にホームレスが襲われる事件などが地元のニュースで報道されていました。
都市部では警察がパトロールしており、事件は郊外で起きることが多かったですが、一部の危険な時間帯やエリアを把握し、警戒することは心掛けていました。さらに、緊急時には日本みたいに110番、119番に連絡することはできませんし、英語での対応に自信がなかったので、貴重品や金銭の管理に常に注意を払いました。
実際に私がトラブルに巻き込まれたことはなく、普通に生活してれば問題はなかったので、実習の後半期間は気楽に生活することが出来ましたが、基本的な危機管理は大切だと感じました。
トロントでの生活は、治安面での課題や日本との違いに苦労することもありましたが、同時に自分が日頃恵まれた環境で生活していることを実感する機会になりました。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

トロントは移民を多く受け入れており、留学生も多いことから、アジア系、ヨーロッパ系、中南米系など人種は様々で、世界中の人々が訪れて生活しています。その特徴はSickKidsにもみられ、大坪先生のラボにも、ナイジェリア、インド、メキシコなどから訪れてフェローとして働かれていました。
このようにトロントは多民族都市であり、その影響もあるのか、病院内のスタッフや街の店員さんやすれ違う人は皆、他人に優しくオープンで、こちらから話しかけるといつでも明るく優しく接してくれました。初めの挨拶は必ずHow are you?、会話の終わりはHave a good day、と半ば形式的に付け足すぐらい接し方がやわらかかったです。さらに自分が間違っていることがあれば、建設的な伝え方で訂正してくださいます。
自分は人見知りがあり、他人に話しかけることに抵抗を感じますが、こういった他人にフレンドリーに話しかけていただけた経験はもっと積極的に人と接して良く、自分の意見をはっきりと主張しても良いんだと学ぶ機会になりました。また、他人を尊重して優しくオープンに接することは、自分の意見を発言しやすくする雰囲気に繋がります。
これは医療現場においても各専門家が議論する際に大切な態度なのではと感じました。上下関係が強すぎたり、感情的になったり、言葉が強かったりすると、他人は忖度や遠慮で思ったことが発言できません。自分から進んで丁寧にオープンに接すること、行動で感謝を示すことは良好な人間関係を生み出し、最終的には患者に取って適切な医療が提供できると感じました。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

今回の海外実習を通して、将来、何かしらの形で留学したいという気持ちが強く生まれました。
今回は私自身が海外で何か大きな仕事をしたわけではなく、むしろ先生方のお力をお借りして実習の機会を頂き、多方面でお世話になることがほとんどでした。自分なりに勉強し、先生方とコミュニケーションを取り、カンファレンスに参加させて頂いたつもりでも、まだまだ出来たこと、見逃したことがたくさんあったと考えています。
そんな中でも上記のように海外での医療、生活、考え方を実際に見ることができたことはとても貴重な財産だと感じています。そのような経験から、自分は将来、臨床的な、あるいは、研究的な立場で海外に留学し、肌で感じた海外の医療や考え方などを地域社会に還元していきたいです。他の地域で行われているやり方が必ずしも自分の地域で適切とは限りませんが、アイディアや事実として持ち帰り、地域で情報共有することで、議論の機会が設けることは、それだけでも地域貢献になるのではないかと考えています。
そのためには、まず大学での勉強や実習にきちんと取り組むこと、臨床研修で臨床的なスキルを磨くこと、学術活動のチャンスがあれば積極的に取り組むことが、ゆくゆく海外留学に挑戦する際に必要なことだと考えます。次回海外に行けるチャンスがいつ来るか先のことで分かりませんが、今度は自分が力になれるように日々の実習、勉強を頑張っていきたいと思います。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：　医学部　医学科6年

氏 名：　森　理紗

授業科目名	選択実習（小児科）
研修先 （大学・国・都市名）	ソウル大学（韓国・ソウル）
研修期間	令和 5年 3月 28日　～　令和 5年 5月 6日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

ソウル大学病院の小児血液腫瘍科で実習をさせていただいた。実習内容は主に朝カンファレンス、病理説明、回診、オンラインカンファレンスであった。また空き時間に入院患者のカルテを見る時間もあった。カルテの中から興味を持った症例をパワーポイントにまとめて英語でプレゼンテーションを行った。ソウル大学小児病院は韓国だけではなくモンゴルや中東の国々からも重症患者が集まるため、様々な病気について勉強することができた。カルテは韓国語だけではなく英語での記載もあったため、わからないことは担当の先生に教えていただきながら、内容を理解することができた。カンファレンスや回診は全て韓国語であり、担当の先生が英語に翻訳して教えてくださった。英語のプレゼンテーションは初めての経験だったが、担当の先生やエジプト人の海外研修生が助けてくださり、無事に終えることができた。また私が研修をしている期間に、BTSのジョングクがソウル大学子供病院に１０億ウォンの寄付を行いニュースになっていた。ソウル大学病院は重症患者が集まり医療費も高額になるため、大企業や資産家からの支援は病院を経営する上で必要不可欠であることを知った。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

韓国での生活を通して、韓国の方は初対面の人とも堂々と会話をしていて親しみやすいと感じた。休憩時間に病院のフードコートに行くと、外来患者さんに一緒にご飯を食べようと誘われたり、充電器を使っていると隣に座っていた人に充電器を貸して欲しいと頼まれたりした。日本ではそのような経験がなかったので驚いた。街を歩いているときに通りすがりの人から道を聞かれることも日常茶飯事であった。また、病院内では医師と英語でコミュニケーションをとることができるが、街中では英語を話すことができる人は少なく、韓国語のみの生活になることがわかった。カフェや食堂の店員さんは日本語ができる人も多く、スマートフォンの翻訳機もあるので日常生活に支障をきたすことは無かったが、韓国語をしっかり勉強していれば、もっと生活しやすかっただろうと感じた。また、韓国では医学生は英語で医学を学ぶため、英語に堪能であることを知った。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載してください。（350字以上）

研修前と後で成長したことは行動力がついたことだ。研修前は大変になりそうな行事に積極的に参加するタイプではなかった。しかし、海外研修が再開されると聞いてからは、自分から動くことができた。ソウル大学病院で研修をするためには鹿児島大学から海外研修に応募申請をするのとは別に、自分でソウル大学のサイトから応募しなければならなかった。英語の履歴書、成績証明書、予防接種記録などを用意することや、英語でのメールのやり取りに慣れないうちは苦労した。また、COVID19の影響で海外実習が中止になっていたため、ソウル大学病院での研修の情報が不足していたこと、韓国で海外研修をするのは鹿児島大学からは1人だったことなど不安も大きかった。しかし、韓国での生活が始まると、病院は広くて綺麗でフードコートも充実していて、実習に集中しやすい環境であった。夕食で先生方から韓牛をご馳走になった。また休日は海外研修生の友達とソウルを観光し、研修期間を満喫することができた。準備が大変だった分、現地で楽しむことができて良かった。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいことは、語学学習である。また、今後の目標は、海外の医師と意見交換ができるようになることである。今回の実習で言葉がわからずに、ソウル大学の先生に質問できなかったことが多々あった。また、私と同じ時期にSNUHで研修を始めた海外研修生が約40人おり、英語で自己紹介をする必要があったが、全員英語が堪能だった。母国語が英語でなくても積極的に英語でコミュニケーションを取ろうとする海外の医学生の姿に感銘を受けた。同時に、英語は世界共通言語であると実感した。言葉が理解できれば他の国の医療についても知ることができ、国内外での医療の発展に繋げられると思うので、医学だけではなく、英語や韓国語などの語学の勉強もしたいと思った。また、今回の経験を糧にして、学会や研究などで海外に行くことができるチャンスがあれば、自分から動いて積極的に参加したい。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 医学部医学科6年

氏 名: 谷　有沙美

授業科目名	選択実習（脳神経外科）
研修先 （大学・国・都市名）	ディポネゴロ大学（インドネシア共和国・スマラン）
研修期間	令和　5年　4月　17　日　～　令和　5　年　5　月　19　日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

Kariadi病院の脳神経外科にて計４週間実習に参加させていただきました。実習内容としては、手術や外来の見学、術前・術後カンファレンスへの参加、自分の受け持った症例の手術参加・プレゼンテーション等でした。カンファレンスや手術内の会話自体はインドネシア語でしたが、スライドやレポートは英語で行われていたので、多少は内容を理解することができました。
私は、最終日に脳瘤（encephalocele）という、先天性の神経管閉鎖障害の一種について発表させていただきました。脳瘤を切除する手術を術野で見学し、疾患に関するスライドを作成しました。英語でスライドを作り発表するという経験を今までしたことがなく苦戦しましたが、現地でのメンターの先生に助けていただき無事に終えることができました。脳瘤は日本では10万人に1人の確率で起こる先天性疾患でかなり珍しいため、私にとっては初めて学ぶ疾患でした。発生機序についてはよくわかっていない部分も多く論文を調べるのには苦労しましたが、英語で文献を読む非常に良い機会になりました。
その他にも、小児が多い地域であるため、小児の脳神経外科領域の手術を見学できる機会に恵まれました。また、現地では学生も手術に入り見学もしくは簡単な手技（吸引や縫合など）をさせてもらえる機会が多く、腫瘍摘出やシャント形成を術野でみることができたのは、よい経験となりました。脳血管疾患や脳腫瘍について学ぶ貴重な機会をいただきました。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

インドネシアでの生活では、日本としきたりや考え方が違うことも多く、柔軟に対応しなければならないと思うことが多くありました。時間への考え方や食事の保存の仕方が日本と全く違い、最初は受け入れられないと思うこともありましたが、次第に「相手は〇〇と言っているが、△という可能性もあるから準備をしていこう」と、現地の風習を受け入れつつ、自分の心身を守る行動をとることができるようになりました。
また、予期しないトラブルが発生した時に、待っていても何も解決しなかったことから、自分でできないことは、早めに状況を説明し、助けを呼ぶことが最善だと今まで以上に考えるようになりました。私は、休日の旅行期間中に飛行機に乗り遅れ経由地で１泊することになってしまう、電気料金が前払いなのを知らなくて部屋が停電してしまうなどの体験をしました。その際、自分で交渉して、トラブルを早めに解決し、次回同じようなことが起きないように回避する行動をとることの重要性を感じました。
予期せぬ事態には遭遇しましたが、幸い現地の方々が非常に親切でお願いするとすぐに助けてくれました。日本では何とか自力でやらなければならないことでも、やり方を聞いた際に、現地の方が一緒に解決してくれました。特に、私が滞在したアパートの大家さんは親切で、私にジャワ島の伝統を体験させたいという考えから現地の市場、一般家庭、結婚式、地域の集会、農村部など様々な場所に連れて行ってくれました。日本とは違って人間関係が密だからこそできることかもしれないですが、人と関わることの楽しさやそこから生まれる感動を再認識しました。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

今までの臨床実習では、与えられた課題をやり、その範囲内でクオリティの良いものを作成しようと努力することが多かったです。
しかし、現地では、皆自分のことで忙しく、私にかまうこと少ないので、待っているだけでは何もできません。そこで、自発的に「次は何があるか、この予定はどうなっているのか、手術には参加できるのか」などの予定をきき、自分はこうしたいという意思を伝える必要がありました。私は日本では、自己主張がかなり苦手で周囲より引っ込み思案だと思うことがよくありましたが、インドネシアに行ったことで人の顔色を窺わず、自分の意思を伝えることに少し抵抗がなくなりました。
また、現地では （インドネシア語の医学書が少ないということも有り）英語で教科書を読み、学生も医療の担い手として手術に参加したり一通りの問診や簡単な手技を行っており、自分の無力感を痛感しました。特に医学英語に関しては、インドネシアの医学生や研修医は医学部１年から当然のように習っているので、主に日本語で医学を勉強している私とは全くバックグランドが違いました。滞在中はその知識の差で、私は簡単な症状を教えてもらったり、簡単な質問をするだけのことが多かったです。今までは、日本語の医学の勉強だけで精一杯だと思っていましたが、英語で医学を勉強することで、他の国の医療事情を理解し議論することができ、医学に対する知見を増やすことができると思うようになりました。　　また、現地の学生に、ある疾患について発表をした旨を話すと、「そのスライドを私にも見せてくれないか」と尋ねられ、インドネシアの医学生は、医学への学習意欲が非常に高いと感じました。同時に、自分も積極的に医学を勉強して色々な医学的な話題を話せるようになりたいと、モチベーションが高まりました。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

私は、1か月間の実習を通じて、様々なバックグランドを抱えながらもお互いを尊重し合い、自分の勉強や仕事に励むディポネゴロ大学の医学生や医師の姿に感銘を受けました。
私は、今後は生活習慣病などのcommon　diseaseを抱える人が、病気を持ちながらも安心して暮らせるような手助けをできるような医師になりたいと考えています。
インドネシアでは家族・地域の結びつき・相互扶助の意識が非常に強く、私のような外国人が困っていても積極的に助けてくれる人が多数いました。また、多くの民族が違う宗教を信じながらも、それぞれを受け入れて暮らしています。日本では、時折バックグランドや考え方が違う人を「常識がない」と否定するような雰囲気が感じられることも有りますし、私も今までに自分と考え方が違う人に対してそう感じたことが何度かありました。
しかし、インドネシアのように、人の生き方や幸せは様々で、色々な考えの人がいてもいいと考えることで、自分や人に対して悪い感情を抱かなくなると感じました。医師としても、それぞれの人に最適な治療を提案するとともに患者の希望を取り入れる柔軟な考え方もって対応していきたいと考えています。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：医学部 医学科 6年

氏 名：茶圓 晃平

授業科目名	選択実習
研修先 （大学・国・都市名）	Massachusetts General Hospital（アメリカ合衆国・ボストン）
研修期間	令和 5年 4月 17日　～　令和5年 7月 14日

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（350字以上）

Massachusetts General Hospital（MGH）のAnesthesia Center for Critical Care Researchの市瀬史教授の研究室で、生体内ガス分子に関する基礎研究と心臓麻酔の臨床実習を行った。
基礎研究では、一酸化窒素や硫化水素などの生体内ガス分子がミトコンドリア代謝に与える影響について細胞を使って調べた。私はこれまで細胞を使った実験の経験はなかったが、渡航前に医歯学総合研究科 血管代謝病態解析学分野で細胞の取り扱いの練習をさせていただいたのもあり、細胞を使った実験の手技や進め方を習得することができた。研修先で行った実験内容と結果については今後の論文発表に関するため割愛する。臨床実習では、市瀬教授の指導のもとMGHで行われている心臓外科手術の麻酔をシャドウイングした。手術の内容は日本での臨床実習で見たものと大きく変わらないが、関わるスタッフが多いことや細かな進め方に日米の考え方の違いを感じた。また、MGHの麻酔科レジデントやハーバード大学の医学生らとともに麻酔のレクチャーを受け、学生が積極的に発言し講師と対話しながら進めるスタイルの教育を経験することができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（350字以上）

電車やバスに乗る、スーパーで買い物をする、食事をする、他国籍の人たちとルームシェアで暮らすなどの生活経験を通して、人種・民族・文化・言語・宗教などの違うさまざまな人が共に暮らしていることを感じた。そして、異なる背景の人を受け入れ、ともに暮らすための社会の土壌があることを感じた。例えば、皆で共通して守るべき最低限のルールや規則は初めての人にも分かりやすいようにきちんと明文化されているいっぽう、それ以外のこと（例えば服装や振る舞いなど）に対してはかなり寛容だと感じた。日本と比べると、あまり他人の目を気にせず、好きな恰好をして、思い思いに過ごしていたのが印象的だった。また、多くの人が互いを尊重し親切にしようとする姿勢を持っていた。多文化共生社会を概念としてではなく経験として実感することができた。このような現在の米国の姿も、建国以来、移民を受け入れてきた歴史の中で、少しずつ発展してきたものであると理解した。ボストンは米国独立運動発祥の地であり、特に米国建国の経緯やその精神を身近に感じられたように思う。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（350字以上）

世界中から医師・研究者が集まり、世界トップレベルの研究が行われているMGHに身を置いたことで、医学研究に対する自分の視点が広く、高くなったように思う。MGHの研究室で常に問われていたのは、研究の成果をできるだけ早く患者さんのもとに還元することだ。細胞やマウスを使った基礎研究から、臨床試験や治験に至ったものまで様々なフェーズのプロジェクトが複数あって、臨床応用するのが当たり前の世界だった。エンジニアやテクニシャンといった人材も豊富で、他の研究室とのコラボレーションもフットワーク軽く行われていて、世界トップレベルの研究の規模感やスピード感を目の当たりにした。このような研究の世界を知り、自分も将来このような環境に身を置いて研究したいと思うようになった。また、MGHやハーバード大学で活躍している日本人の医師や研究者と面会し研究内容やキャリアについて話を聞いたことで、より具体的に自分のキャリアを考えるきっかけとなった。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（350字以上）

私はこれまで地域医療学分野の自主研究で、地域コミュニティの中で行われる「おすそわけ」と健康アウトカムとの関連について研究してきた。MGHの所属研究室で、この研究を英語でプレゼンテーションする機会を頂いた。研究室の多国籍のメンバーに対して、「おすそわけ」という文化的習慣を英語で説明することは、私自身も「おすそわけ」を様々な視点から見つめなおすチャンスとなった。また、プレゼンテーションに対して率直な感想や質問をもらい、今後の研究の方向性を考える刺激となった。今後は、「おすそわけ」の研究結果を論文として世界に発信することと、メンバーとともに取り組んでいる地域の「おすそわけ」を活発にするような取り組み（鹿児島大学・JAグループ鹿児島　健康まちづくりプロジェクト）を継続する。また、卒業後は鹿児島県内の病院で初期臨床研修を行い、地域医療に貢献する。